

# モズの早贄に關する觀察

熊代三郎

## 緒言

鳥類の生活と人生との間に密接なる利害關係のあることは吾人が茲に説明するまでもない。特に間接的ながら農林業上より視たる有益鳥類の働きの大なるものであることは農林業者に充分知られて居る。その内賜類の食性については内田<sup>(1)</sup>の詳細なる調査報告がある。又賜類の食性の一部とも見られる賜の早贄については古くより一般人に知られ之れに關する調査報告も又多い<sup>(1),(2),(3),(4),(5),(6),(7),(8)</sup>。

モズの早贄は岡山縣倉敷地方では秋冬の候野外で容易に見ることが出来る。この早贄は一般にモズが冬の食物缺亡時期に備へる一種の貯食行爲と信ぜられて居る。しかし現今の早贄に對する説はその目的は冬季の食物缺亡に備へる單純な貯食の爲のみでなく、動物捕殺に多分の興味を持つこと、捕食に當つて食餌動物を枝に刺して啄食する等の諸習性が相互作用して生れた奇妙な習性であるとせられて居る。

著者は倉敷市を中心とした諸地方を踏査して得た觀察記録に基いて早贄に關する二、三の問題及び早贄上に現はれたモズと人生との利害關係並に昆蟲との關係等について考察して見度いと思ふ。しかしこの調査は右の目的のため積極的に行つたものではなく單に田舎に住んで居る爲に興へられる機會と寸暇とを利用して得た數年間の記録を基礎としたも

のに過ぎない。

本文を草するに當り岡山縣保安課小林泰造氏より本縣内の鴟類分布につき教示を受け、又恩師春川博士よりは校閲の勞を賜つたことを記して感謝の意を表する次第である。

### 本地方の鴟の種類と棲息期間

本地方の早糞を論ずるには本地方に棲息する鴟の種類並にその棲息期間を知ることが最も肝要である。著者は未だ鴟の種類を明かに識別するだけの充分の知識に缺けてゐるから、岡山縣保安課小林泰造氏の御教示を願つた。

同氏に據れば縣下に分布するものはモズ、チゴモズ、アカモズの三種で、モズは縣下至る所に多く、チゴモズは美作方面にて時々見ることがあり南部地方では極めて稀に見、アカモズは甚だ稀なる種類である由である。

従つて岡山縣南部地方の鴟は大體モズ *Lanius borealis* TEMMINCK et SCHLEGEL をみなしつゝと思ふ。

飯島<sup>(4)</sup>に據ればモズは夏は山地に冬は平地へ移動し、又内田<sup>(2)</sup>川口<sup>(5)</sup>に據るも季節により一種の小移動を行ふものである。著者はこの山地と平地とを何の程度に區別すべきかに迷ふも、本地方では大體九月初旬より人里近い平地に現はれ、翌年の五月末頃までには大多數は平地を去るやうである。しかし倉敷附近の平地又は山地では注意して觀察すれば六、七、八月の候にも時々その姿と鳴聲に接することが出来る。即ち數年間注意を拂つた觀察の結果を記せば第一表に示す通りである。

第一表 夏季倉敷附近に於けるモズの観察表

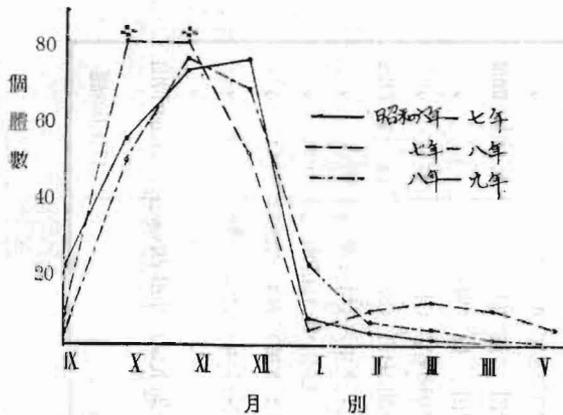
観察年月日	備	考	観察年月日	備	考
昭和6年8:2	倉敷市名田山(名)にて示す、果樹園	〃	昭和9年7:29	(加) 山 麓、山地	
〃 6:19	〃	〃	〃 8:16	(加) 足守川畔、平地	
〃 6:30	吉備郡生石村(生)にて示す、人家附近平地	〃	〃	(中) 人家附近、平地	
〃 7:17	吉備郡加茂村(加)にて示す、足守川畔平地	昭和10年3:19		(中) 松林内、山地	
〃 7:19	同 郡庄村、畑、平地	〃 6:17	倉敷市研究所構内	平地	
〃 8:25	同 郡中庄村(中)にて示す、畑、山地	〃 6:26	(中) 松林内、山地		
昭和7年6:19	(加) 足守川畔、平地	〃 7:2	(中) 〃	〃	
〃 7:31	(中) 人家附近、平地	〃 7:5	(中) 〃	〃	
〃	(加) 畑、平地	〃 7:30	(中) 夕方、人家附近、平地		
昭和9年6:15	(生) 畑、平地	〃 7:21	(中) 松林内、山地		
〃 6:27	(生) 人家附近、平地	〃	(中) 早朝、〃	〃	

上表に記した著者の目撃したものはモズの成鳥或は幼鳥の移動の極端に早いか或は晚いものか、又は一時的に平地に出現したもののか等の識別は不明であるが兎も角平地又は山地附近で夏季と雖も見られる。内田<sup>(2)</sup>によれば東北地方では夏でも多く平地に棲息して居る山である。

早費を作る時期と其の数の消長

早費を作る時期及び消長は鳩の種類、移動狀況、氣象、早費に供せらるゝ動物の棲息狀態等により異なることと思ふ。  
 アカモズ *Lanius cristatus superciliosus* LITHAN は八木及び松山(10)に據れば長野縣菅平高原にては夏季早費を作ると云ふ。モズに關しては川口(5)は九州地方では十一月下旬より二月上旬まで紀州地方では十二月末まで飛驒では十一月一

第一圖



杯早費を作るとし、石澤(6)は東京地方では普通十一月乃至十二月に作るとの説を大體認められ、春の早費として四月頃に作られた早費の觀察を挙げられて居る。齊藤(7)に従へば千葉縣下では二月末までのやうである。

著者が倉敷市附近の平地で早費を作る期間とその消長を知らんが爲に一定地域の一定工作物(研究所實驗圃場周圍の鐵條網)上に作られたものを調査した結果を第一圖に示す。

第一圖は前述の如く特定の場所に作られた早費の季節的消長の模様であるがそれに據れば早費は九月より次年の五月に亘り作られることが判る。その間大部分のものは十月より十二月に亘り作られるものと言へる。右の結果だけでは四、五月中の早費の数は少數であるが調査

場所によつては相當の數を見た。即ち四、五月の候と雖も場所により蚯蚓、蛙類、マルクビツチハンメウ等を可成り多く見ることがある。

### 早糞の刺される高さ、樹種その他

早糞の刺される高さに就いても既に調査報告せられて居るが川口<sup>(5)</sup>はその高低と積雪の深さとが關係があるとなす地方を擧げて居る。倉敷地方では積雪は概ね甚だしい故に、この關係について觀察することは出来なかつたが只昭和五年三月より十一月の間主に鍍條網に作られた早糞につきて高さを調査した大要を第二圖に掲げる。



次に早糞の作られる場所は必ずしも尖鋭なるなる枝端と限られて居らず、種々の樹木、果樹、桑樹、雜草、作物の支柱、鍍條網刺針等雜多である。又早糞は悉く刺し通すものではなく竹の一節より生じた枝と枝との根元に挟まれて居た蛙、葦の莖と葉鞘の間に鮒、金龜子科幼蟲、ジュツダマの主梗と枝梗の間に蛙等が挟まれ又は懸けられたとも言へる状態に置かれた場合をも觀察した。この事實は萩山<sup>(4)</sup>、八幡<sup>(1)</sup>氏等によつて既に觀察せられて居る。

又著者が早糞を發見した植物名その他を記すれば次のやうである。

梅、桃、梨、棠梨、楓、コデマリ、ウツギ、サザンクワ、オリーブ、カラタチ、柳、檜、ボブラ、赤楊、アキグミ、







剛毛類 106F...45.41%	昆蟲類 107D...47.44%	獸類目 2... 0.19%	トノサマガハル	○
魚類 80... 2.71%	双翅目 10... 0.95%	鱗目 103... 9.81%	アヲガハル	○
			アカガハル	○
			アヲガハル	○
			ツチガハル	○
			フゼウウ	○
			シマフゼウ	○
			ハ	○
			フ	○
			フソコ	○
			トビハゼ	?
			スズメバチ	○
			蜂の一種	?
節足動物 105L 47.62%			ハナナフ	○
			ハナフナフ	○
			蛇の一種	?
			紋白藤(幼)	○
			アカタチハ	○
			夜露科(幼)	○

モズの早實に関する観察

門 別	類 別	目別、総虫数割合各自%	種 名	書誌別
		毛翅目 4... 0.39%	蚊 蠅 科 (幼) 6	×
		異翅目 8... 0.70%	リンゴケンモン (幼) 10	×
			フタラヌズメ 1	×
			ヒメホウジヤク 1	×
			二化螟 幼 (幼) 5	×
			不詳 (幼) 33	×
			トビケラの一類 (幼) 4	?
			タガメ 2	×
			コオヒムシ 3	×
			ダイコウチ 1	×
			ミヅカマキリ 2	×
			ヤルカビツチバネウ 3	○
			シラホシハナムグリ 1	×
			金龜子科 (幼) 3	×
			シデムシ 2	○
			コガタノゲンゴロウ 2	×
			ハイイロゲンゴロウ 4	?
			甲 蟲 の 一 種 3	?

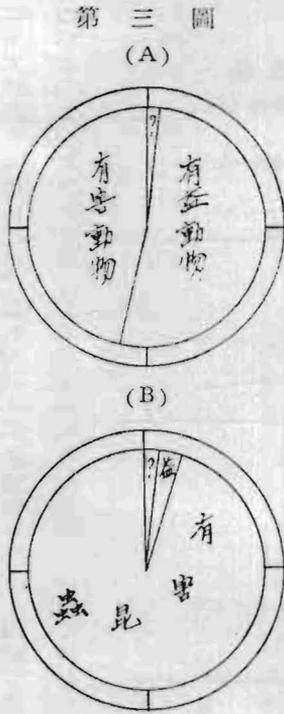
鞘翅目 104... 9.3%

種目	23... 219%	種目	13... 129%								
カ	ナ	キ	リ	23	○						
コ	バ	ネ	イ	ナ	ゴ	129	×				
シ	ヤ	ウ	リ	ヤ	ウ	バ	ツ	タ	8	×	
オ	ソ	ノ	ズ	バ	ツ	タ	タ	40	×		
ダ	イ	ヌ	ウ	バ	ツ	タ	タ	2	×		
セ	ス	デ	ツ	チ	イ	ナ	ゴ	3	×		
イ	ホ	バ	ツ	タ	タ	1			×		
カ								140	×		
エ	ソ	マ	コ	ホ	ロ	ギ		50	×		
ミ	ツ	カ	ト	コ	ホ	ロ	ギ	1	×		
マ	ダ	ラ	オ	カ	マ	コ	ホ	ロ	ギ	1	×
オ	カ	マ	マ	コ	ホ	ロ	ギ	2	×		
コ	バ	ネ	サ	サ	キ	リ		1	×		
ク	ビ	キ	リ	バ	ツ	タ		2	×		
蝗	蠶	科	の	一	種			5	×		
マ	キ	マ	カ	ネ				2	?		
ギ	シ	ヤ	ソ	マ				3	○		
ギ	ソ	ヤ	ソ	マ	(効)			5	○		
蝗	蠶	科	(効)					3	?		

モズの早貴に関する観察



害動物を捕食し又は直接利用せられる魚類その他の有益動物も含まれて居る。この有益性の區別は時と場合、又は見解の如何によりその決定が困難な場合もある。著者は松村(13)その他の書物に據り、又著者の概念に従つて、假りに有益の分類を試みた。その結果は第三表有益欄に示した通であるがその内小鳥の一種、爬虫類、トビハゼ、蜂の一種、蛇の一種、トビケラ類に屬するもの、ハイイロゲンゴロウ、甲蟲の一種、アキアカネ、蜻蛉科に屬する幼蟲、蜘蛛の一種、アカテガニ等三十六個は假りに害益疑問又は何れにしても重要でないものとし、又蛙類は有益動物として取り扱つた。この調査成績から全早蟻動物の害益性の分野並に特に農業と密接なる利害關係のある昆蟲類に屬するもの、害益性分野の模様を記すれば次の通である。又之を圖によつて示せば第三圖となる。



早蟻全般について。第三圖(A)

有害動物 四六・三一%

有益動物 五二・〇五%

害益疑問又は不明瞭のもの 一・六二%

昆蟲類のみについて。第三圖(B)

有害昆蟲 九四・九五%

有益昆蟲 三・一四%

害益疑問又は不明瞭のもの 一・九%

右の數字及び第三圖にて明かなる如く全般的には有益動物と有害動物との差は僅少である。昆蟲類の部は九四%まで

は害虫によつて占められ僅か三%が益蟲であるに過ぎない。

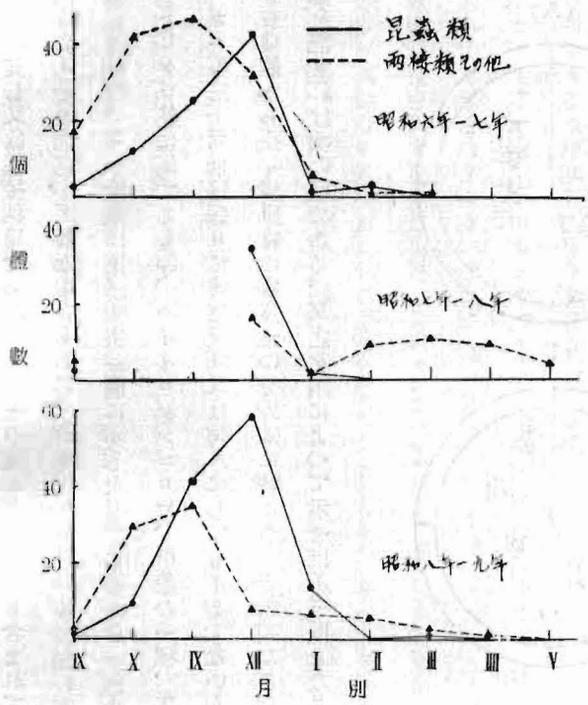
以上の數字は既に説明したやうに早費の半數近くを占める蛙類を益動物として取り扱つた結果で、害又は益作用を量的に示す標準とはならない。即ち西川(1)が兩棲類中の日本雨蛙の食餌について調査した結果大部分は昆蟲類にして且つ害虫が主であつたことを報告して居るが早費昆蟲の大部分を占める害虫の農林、水産業に及ぼす害も又蛙類、魚類等の

貢獻より以上に重要視する必要があるかも知れない。

次に早費上に現はれた昆蟲類と他動物(主に兩棲類)の季節的消長について考察して見るに、これは第一圖製作の基礎とした研究所圃場に於ける早費についてであるが故にこれ又特定場所の模様を示すに過ぎないかも知れないが昭和六年より九年に亘る調査成績を第四圖に示す。

第四圖によれば二年次の十、十一月は月別による調査を缺ぐため不明なるも大體に於いて初期に兩棲類多く中頃に昆蟲類多數となり

第四圖



末期には昆蟲類が少くなつて居る。

第三表中の早費昆蟲を一覽するに水棲昆蟲、潛土性昆蟲、被害植物内に潜在するもの、飛翔、歩行性等多種多様のものが含まれて居ることが判る。これ等の昆蟲は總て普通の生活環境にあつた時に捕へられたものと考へる事は出来ない。蟲の移動、池沼の減水、枯濁等による水面露出、農耕等による環境の變化によつて生じた機會に捕へられたものと思ふ。又早費調査により昆蟲の生活史その他と關聯した事項をも併せて記録したるも茲には水棲昆蟲及び飛翔能力を有する昆蟲の割合のみについて記することとする。

早費昆蟲類一〇五〇個中水棲昆蟲の割合を算出して見るに二六個一・四七%で極めて少數に過ぎない。水中生活を常態とせる昆蟲類がモズに襲はれることの少いことは吾人が第一に想像することである。

又飛翔能力を有する昆蟲について見るに、彼等昆蟲類が總て飛翔中に捕へられたとは考へられないが、運動中のものはモズに發見せられ易いものではないかと思ふ。即ち八〇%は飛翔性昆蟲によつて占められて居る。

註 カマドウマ類、マルクビツチハンメウは飛翔しないものとし、ケラ、コホロギ類は何れのステージにあつたか不明であるが飛翔能力を有するものとした。

## 摘 要

本報告に於いて著者は岡山縣南部地方に於いてモズの早費を調査した結果について考察を試みた。

一、岡山縣南部地方にて普通に見られる鳩はモズ *Lanius bucephalus* Temminck et Schlegel として取り扱つた。モ

ズは通常九月頃平地に出現し四、五月頃に至り移動を行ひ自然に姿を消すものと云はれてゐる。しかし倉敷市附近では大體に於いて上記の如くなるも、六、七、八月の候と雖も時々その姿と特徴ある鳴聲に接することがある。

一、早蟄の製作は九月より翌年の五月頃まで続けられるがその間盛に作られるのは十月より十二月に至る三ヶ月間で特に十一月が最も盛なやうである。

一、早蟄の置かれる高さについては充分の觀察がないが普通高所には少い様である。又早蟄動物は悉く刺されるとは限らず挟まれ又は懸けられたとも言へる状態に置かれることがある。刺す場所は樹枝、鐵條網、支柱等が利用せられその刺されて居た植物の種類は二八種を數へた。

一、刺された犠牲動物體の内六八%は大體原形を保ち三二%は體の一部を缺き又は體の一片であつた。又蛙類の大形のもの是一個體を接近せる場所に分割して刺すこともあるやうに考へられる。

一、早蟄動物の種名を充分に確めることは出来なかつたが六五種を數へその數は昆蟲類、兩棲類、魚類、貧毛類、哺乳類、爬蟲類、蛭類、鳥類、蛛形類、甲殼類の順位を示し昆蟲、兩棲類の數は略同様である。又害益性の分野は著者の類別法によれば、全般的に見るときは有益動物が少し多い。又早蟄の半數近くを占める昆蟲類について見れば大部分は害蟲である。但し自然界に於ける之等の動物の實際の働き即ち吾人に對する害益作用をこの數字によつて決定することは出来ない。又調査の結果によれば昆蟲、兩棲類の割合の季節的變化の大體の傾向を知ることが出来る。

一、早蟄動物中には水棲動物も利用せられて居るが、モズが之等の動物の水中にあるものを積極的に攻撃して捕へたものではなく、不自然な環境又は移動等の機會に捕へられたものと思はれる。昆蟲類について見るに水棲昆蟲の割合は

僅かに二・五%飛翅能力を有すると思はれる昆蟲は約八〇%であつた。

### 参 考 文 獻

- (1) 内田清之助 本邦産鳥類ト農桑トノ關係調査成績 農商務省農事試験場特別報告 第二九號 大正二年  
鳥學雜誌 大正十二年
- (2) 〃
- (3) 根山徳太郎 鳥類の貯食 動物學雜誌 三七卷 第四三六號 大正十四年  
モズの早費 アミーバ、三卷第一、二號 昭和六年
- (4) 〃
- (5) 川口孫治郎 モズに關する實驗觀察 農林省畜産局鳥獸彙報 一卷第五號 昭和六年  
石澤 健大 モズの早費に就て 植物及動物 一卷第三號 昭和八年
- (6) 齋藤源三郎 鴟の早費 鳥 八卷第三九號 昭和九年
- (7) 小野 勇 モズの刺餌に就て 博物同志會會報 (鹿兒島高等農學校) 四卷第一四號 昭和十年
- (8) 飯島 魁 保護鳥論譜 明治三十八年
- (9) 八木 誠政 アカモズの早費の生態的觀察 植物及動物 二卷第九號 昭和九年
- (10) 松山 資郎 八幡 榮作 鴟(百舌鳥)の草蚕の調査 理學界 二七卷第九號 昭和四年
- (11) 松村 松年 日本益蟲目錄 大正三年
- (12) 〃 大日本書誌圖說 昭和七年
- (13) 西川 砂 桑園に棲息する「日本雨蛙」の食餌調査 蠶業試驗場彙報 第四二號 昭和七年
- (14)

モズの早費に關する觀察

(昭和十年十二月二日)